

乳幼児教育ビジョン講演会～乳幼児期に大切にしたいこと～を実施しました。

保育所・幼稚園の先生方の研修とあわせて、市民の皆さんに「舞鶴市乳幼児教育ビジョン」や、乳幼児期の重要性、特徴、大切にしたいことなどを知っていただき、みんなで一緒に舞鶴の宝ものである子どもたちを育もうと講演会を開催しました。会場ではお子様連れのご家族の姿も見られ約160人の参加がありました。

日時 平成28年6月18日(土) 13:30～15:30
 場所 中総合会館 ホール
 講師 神戸大学大学院 准教授 北野幸子氏
 (教育学博士、前舞鶴市幼児教育ビジョン策定懇話会会長)



参加園

岡田保育園	西乳児保育所
相愛保育園	朝日幼稚園
タンポポハウス	朝来幼稚園
なかすじ保育園	倉梯幼稚園
東山保育園	シオン幼稚園
八雲保育園	ひばり幼稚園
やまもも保育園	三鶴幼稚園
うみべのもり保育所	舞鶴幼稚園
中保育所	

「～子どもの気持ちを知ろうとすること～が乳幼児期に大人が大切にしなければならないこと」
「感情と共に体験・経験を通して育つことが、生きる力の基盤になる」 ～北野先生より～

◎舞鶴市の作ったビジョンは、大人がただ作っただけのものではなく、地域の中で次世代を育成していこうという画期的なもの。ビジョンを作ることで次世代育成のコミュニティが創生されつつある。

◎乳幼児期は、子ども自ら興味関心を持ったり、やりたい気持ちや探究心を起点とし、自分で考えやってみるといった、主体性を大切にしたい遊びを通じた学びが重要。

◎年齢に関わらず、発達に合わせた教育の保障が大事。教育のカギとなるのは先生の力量。洞察力が子どもの育ちに与える影響が大きい。乳幼児期の教育の重要性を共通認識としておくことが必要。

◎小学校以降の教育の前倒しが乳幼児期の教育にふさわしいというわけではなく、乳幼児期は、その発達に応じて、発達に合わせた方法がある。

◎2歳児は自己主張が強い。もともとよく使う言葉は「自分が」「ダメ」「いや」。その理由は、この頃になると身体の動きがしっかりしてきて、行きたい所へ行き、したいことができるようになる。それが自信になるので、「自分でしたい!」という思いを出すようになる。そういう時期は、人に言われてやることよりも、自分がやってみたいことをやった方が、子どもたちには経験としてふさわしい、というのが発達の理由。

◎動きの面では、乳幼児期はいろんな動きを体験し、その多様な動きが、その先の特定の動きをするための基礎となっていく。

◎運動遊びでも自分が「したい」と思ったものに取り組む方がこの時期の体験としてはふさわしい。子どもの気持ちを考えることが大切。

◎家庭教育と集団保育との違いは、「多様性に対する寛容性」にあり、(他の子の存在や他の子との遊びが)子どもの社会性を育てる。その中で知性も育っていく。

◎支援の必要な子どもこそ早くから専門的な教育が大切である。教育格差を生まないためにも、経済的に厳しい子にとって3歳までの集団保育を受けることが重要である。

◎日本でも乳幼児期の教育の質向上へ

の取り組みがいろんな所でスタートしている。去年4月に文部科学省の国立教育政策研究所で乳幼児期の教育専門のポストができた。8月には東大に発達保育実践政策学センターが、今年の4月には幼児教育研究センターができた。地方との研究拠点作りが日本の乳幼児教育の次のステップになる。

◎乳幼児期の教育で大切にしたいことは「発達に適した保育」。生れてからの期間が短いということは、個人による違いが大きく影響するということ。みんなで一斉に同じことをするのはではなく、子ども自身の個性に応じて一人ひとりの子どもの興味を大切にしたい教育を大事にしていきたい。

◎ただ遊んでいるのを見守っているだけではなく、どんな力をつけたいか、どんな学びを得ているか、それにはどんな材料(教材)を用意すれば良いかなど、保育者が見通しを持つことも大切になってくる。

◎専門職である保育者はこれらを理解し、子どもが主語になるような声かけも行える。

◎子どもが主体的になるには、安心感・信頼感が大切になり、自分の思いを受けとめてもらえるという安心感が、子どもの育ちの根幹になる。クラスが崩壊していたり、いじめのあるクラスでは子どもの力は伸びない。

◎クラスや地域が安心できる自分の大好きな場所であることが、自分を発揮できる、物・人への興味を広げられることへとつながる。それらが基本的な生活習慣、学習、社会性にもつながっていく。

◎このため、気持ちの育ちを乳幼児期には大事にしていく。乳幼児期の子どもは「耳」からだけでは学ばない。体験と気持ちが関わっていることでないと、子どもたちは自分のものにできない。

◎基本的な生活習慣は、愛着の形成と基本的信頼感があること、大好きなモデルとなる人がいて、そのモデルと一緒に模倣しながら繰り返し体験していくことが大切になる。

◎愛着の形成、自尊感情の有無が子どもの育ちの根底にある。子どもをしつける時は、子どもの誇りにつながるようにしなければ定着化しない。乳幼児期は感情に左右されやすい。良いイメージを持ちながらしつけていく。

◎主体性は選ぶところから。与えられたことを行うのではなく「自分から」ということが大切。小学校の新学習指導要領でも、アクティブラーニングという学び方が盛り込まれ、何を学んだかだけでなく「どのように学んだか」を大切にしている。

◎(目標への情熱や粘り強さ、社会性、自尊心など)非認知的能力を乳幼児期に育てていく。大きくなってからでは育ちにくい。与えられたこと、指示命令だけで蓄積された経験、分かった・分からないだけで育った子どもは知性の扉を開くことができない。また、いざこざの経験をさせてもらっていない子は、問題解決の力が育たない。自己主張のぶつかり合い、人との関わり方を感情と共に体験していくことから学んでいく。

◎子どもの気持ちを知ろうとすることが乳幼児期の子どもを育てるうえで、大人が大切にしなければならないこと。感情と共に体験・経験を通して育つことが、生きる力の基盤になる。大人の思いだけでなく、子どもの「やりたい」思いを大切にしていく。

◎乳幼児期の教育は、子どもの気持ち・興味関心を見とる洞察力がなければ行えない。そのために専門性が大切になり、保育の可視化をしていかなければならない。

◎乳幼児期の子どもの育ちは、小学校以降の学びの基となる大切なものである。そのことを広く知ってもらいたい。

